

從全球時代視域下的生態女性主義視點來閱讀津島佑子《山貓巨蛋》：饒恕文學作品的誕生

曾秋桂

淡江大學日本語文學系教授

摘要

東日本大震災後，小說家津島佑子(1947-2016)深感文學的必要性而持續創作發表了「熊熊的寧靜之海」、《山貓巨蛋》等作品。特別是《山貓巨蛋》可視為一部全球時代視域下的時代小說。因為該作品中提及了16個國家、9個國籍、20名以上的出現人物之多。且時間是橫跨了日本戰敗64年間的長編作品。此浩大規模的巨作，正是嘗試用生態女性主義視點來閱讀的絕佳材料。

嘗試用生態女性主義視點來閱讀津島佑子《山貓巨蛋》的結果證明：糾正日本社會常見的偏見、歧視，以及存在於全球時代的人種歧視、各國爭權奪利的觀點上，女性生態主義的觀點的確是有其功效的。且後311出現的小說主題，常常離不開「共生」的課題。但津島佑子的《山貓巨蛋》是闡述到達「共生」之前的「饒恕」才是更重要的心理建設課題。津島佑子的《山貓巨蛋》的價值，於是在此被彰顯了出來。再者若能體認到製造各階級的差異、歧視的惡源，其實是人類的本質，才能開拓出彼此真正共存之道。此亦為何津島佑子《山貓巨蛋》之所以成為全球視域下生態女性主義關懷的饒恕文學作品，其誕生的緣由即是在此。

關鍵字：生態女性主義 全球時代視域 津島佑子 《山貓巨蛋》
饒恕文學作品

受理日期：2019年3月10日

通過日期：2019年5月3日

Yuko Tsushima's "Yamaneko Dome" by reading from the Viewpoint of Ecofeminism in the Global Age: The Birth of Forgiveness Literature

Tseng Chiu-Kuei

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

After the Great East Japan Earthquake, Yuko Tsushima (1947-2016) has felt as thoughtful of the necessity of literature, actively putting out the work "Higuma no shizukana Umi", "Yamaneko Dome" etc. In particular, "Yamaneko Dome" which has nine kinds of races, more than 20 characters emerged, in particular in 16 countries or more in the era of global world can be viewed as a periodic novel of 64 years and a global perspective age. And this work is a good material to read from the viewpoint of eco feminism.

If we will read "Yamaneko Dome" from the viewpoint of ecofeminism, we can ask questions about prejudice and discrimination in Japanese society, racial discrimination that exists in the world, and contest of the interests among nations. Also, in addition to the theme of "co-existence" of the post 311 literature, "Yamaneko Dome" has the theme of "forgiveness" before reaching "symbiosis", it can be evaluated as a special post 311 work with special meaning. Furthermore, recognizing the evil that creates discrimination and prejudice at each level as the essence of human beings shows that the path of true coexistence opens up. This is the origin of unique value on "Yamaneko Dome" which emerges from the viewpoint of eco feminism.

Keywords: eco feminism global perspective age Yuko Tsushima

"Yamaneko Dome" forgiveness literature

グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む津島佑子の『ヤマネコ・ドーム』—許しの文学の誕生—

曾秋桂

淡江大学日本語文学科教授

要旨

東日本大震災後、津島佑子(1947-2016)は、文学の持つ必要性を身に沁みるほど感じ、作品「ヒグマの静かな海」、『ヤマネコ・ドーム』などを積極的に世に出している。特に16カ国以上にも及んで、9種類の人種、20名以上もの登場人物を登場させた、グローバル的視野を持つスケールの大きい、64年間の時代小説と見てもよい『ヤマネコ・ドーム』こそ、グローバル化時代において、エコフェミニズムの視点から読むに値する好材料である。

津島佑子『ヤマネコ・ドーム』をエコフェミニズムの視点から読むと、日本社会に潜む偏見、差別だけではなく、世界に存在する人種差別、一国の利益の争奪を問い直すことができ、エコフェミニズムの視点が確かに有効だということが証明された。また、ポスト311の小説はよく「共生」という主題に収斂されがちだが、『ヤマネコ・ドーム』は他のポスト311小説とは違って「共生」にたどり着く前にある「許し」をテーマにし、特別な意味のある作品として評価できる。さらに、各階層の差別、偏見を生み出す悪を人間の本質として認識すれば、真なる共存の道が切り開かれ、これこそエコフェミニズムとしての許しの文学である『ヤマネコ・ドーム』が誕生した由来だと言えよう。

キーワード:エコフェミニズム グローバル化時代 津島佑子

『ヤマネコ・ドーム』 許しの文学

グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む津島佑子の『ヤマネコ・ドーム』—許しの文学の誕生—

曾秋桂

淡江大学日本語文学科教授

1. はじめに

東日本大震災(通称 311)が 2011 年 3 月 11 日に起きてから、「三位一体」(地震、津波、原子力発電所の放射線漏洩)の未曾有な災難に直面した津島佑子(1947-2016)は、作品「ヒグマの静かな海」(2011. 12 月『新潮』)を發表し、人間に殺された動物のヒグマが辿った道と、放射線の危機と共にポスト 311 の世界で人間が辿ろうとする道とが重なっており、人間が抱えている不安に目覚めた生き方を開示している¹。引き続き、2012 年に放射性物質からの脅威に対して、「「文学」の喚起力、あるいは抵抗力が試されている」²と文学の持つ必要性を提起している。その後、東日本大震災後の 2013 年に、世に送り出した長篇小説『ヤマネコ・ドーム』(2013、講談社、初出『群像』2013、1 月号)は、文学の持つ「喚起力」、「抵抗力」の真価を問うた作品だと言えよう。また、『ヤマネコ・ドーム』は、第 2 次世界大戦が残した混血孤児の問題に焦点を当て、世界各地の出来事³を織り込ませ、16 カ国以上にも及ぶ地域の、9 種類の人種、20 名以上もの登場人物

¹ 詳しくは曾秋桂「ネイチャーライティングとしてのポスト 3・11 原発文学—くま・馬・ヒグマが呈示した黙示録—」(2014)『台湾日本語文学学会学報』第 35 号台湾日本語文学学会 P33-56 を参照されたい。

² 津島佑子「「文学」の抵抗力」(2012. 3)『臨時増刊 3・11 から一年 100 人の作家の言葉』文藝春秋 P215「人間の五感ではまったくその存在を感じとることができず、健康への被害も早く二年ぐらい経たないと出て来ないといわれる放射性物質。生身の人間にとって、これほど扱いにくい「毒」はない。けれど、だからこそ、今、こんな状況になった日本で、眼に見えない世界を未来の時間も視野に入れて、言語で描こうとする「文学」の喚起力、あるいは抵抗力が試されている、そう私は思わずにいられない」としている。

³ 例えば、第 6 章では、ネルーダの死・チリのクーデター・パリの平和協定・日航ハイジャック・ミッテラン大統領落選・韓国の金大中氏の拉致の歴史的な出来事に触れられている。

⁴を登場させた、グローバル的視野を持つスケールの大きい、64年間の時代小説だと見てもよからう。このようなグローバル化時代を描いた『ヤマネコ・ドーム』こそ、エコフェミニズムの視点から読む日本の特質を究明するに値する好材料である。そこで、本論文では、津島佑子の『ヤマネコ・ドーム』を対象に、エコフェミニズムの視点から試みることにしたのである。

2. エコフェミニズム (eco-feminism)⁵の概念

エコフェミニズム (eco-feminism) はエコロジカル (ecological) とフェミニズム (feminism) を組み合わせて出来た言葉で、1974年に環境革新を先導する女性たちに呼びかけたフランスのフランソワーズ・ドゥボンヌによって命名された用語である。人間による自然の支配と男性による女性の支配には重要な関係があるという洞察から、新しい自然と人間の関係、女性と男性の関係を求める思想として、アメリカで一層発展したそうである⁶。

多岐に発展してきたエコフェミニズム (eco-feminism) について、渡久山清美・渡久山幸功が「男性による女性支配 (女性への抑圧構造) と人間による自然支配 (自然・生態系に対する抑圧構造) は、同一の社会システム、資本主義家父長制あるいは開発家父長制という男性権力構造に起因する」⁷ことに注目し、「男性社会が作り上げた、こ

⁴ 作品で触れたものを見た限り、日本、アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、イタリア、スペイン、デンマーク、ニュージーランド、ロシア、ベトナム、インドネシア、インド、チリ、韓国、ドイツの16カ国、日本人、アメリカ人、デンマーク人、スウェーデン人、オランダ人、ベトナム人、インドネシア人、細分化されたプルトン人、アイヌ人の9人種、名前のない登場人物の、見知らぬ若い女、黒いメガネをかけた老人の2人、名前のある登場人物の、ヨン子の母、ヨン子、サラ、朝美母、八重、ター坊の母、ター坊、ミッチ、カズ、ミキちゃん、トミー、ケイト、タケシ、フミ、サチ (ジョウイス)、ヒデ、マコ、アミちゃん (アニー)、ジェフ (ノブ)、オディール、ソニア、ニスルの22名である。

⁵ エコフェミニズムに関する記述は、詳しく曾秋桂「エコフェミニズムの視点から読む『チェルノブイリの祈り』」(2018)『台湾日本語教育論文集』第30号台湾日本語教育学会 P186-204 を参照されたい。

⁶ 井上輝子・上野千鶴子代表編(2000)『岩波女性学事典』岩波書店 P44。

⁷ 渡久山清美・渡久山幸功(2013)「エコフェミニズム再考ー開発資本主義家父長制に対するオルタナティブな理論としてー」『人間学科』29号琉球大学法文学部人間科学科 P156。

の支配の構造それ自体を解消しないかぎり、環境問題も、女性支配もなくなる」⁸とする森岡正博の政治思想概念に触れ⁹、より広い視野で、「真の意味での社会変革を実現するために必要とされるエコフェミニズムは、女性だけではなく男性にも開かれているという認識を持って、脱男制的な男性、つまり、ステレオタイプの男性像を追い求めることのない、エコフェミニズム的思考を擁する男性¹⁰をエコフェミニズム運動に取り込んだり、増やしていくような包括的な理論構築の実践である」¹¹と提案した。さらに、「エコフェミニズムは、(自然と女性という)単立した問題についての運動に終始するのではなく、すべての被抑圧集団の解放をめざす思想に至る」と再定義した喜納育江の説¹²を取り入れた渡久山清美・渡久山幸功は、「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直すのがエコフェミニズムの基本思考であり、特に、グローバル化が進む経済構造や生態系の環境問題の時代を迎えた 21 世紀の現在、このような認識を極めて有効な概念であろう」¹³と帰結した。

そこで、本論文では、渡久山清美・渡久山幸功が広汎に下した「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直す」ことをエコフェミニズムの定義とする。以下、それを指針として、『ヤマネコ・ドーム』を考察することにする。

3. 『ヤマネコ・ドーム』の概観と分析

『ヤマネコ・ドーム』は 11 章によって構成された、第 3 人称によ

⁸ 森岡正博(1995)「エコロジーと女性—エコフェミニズム」小原秀雄監修『環境思想の系譜・3』東海大学出版会 P152。

⁹ 渡久山清美・渡久山幸功(2013)「エコフェミニズム再考—開発資本主義家父長制に対するオルタナティブな理論として—」『人間学科』29 号琉球大学法文学部人間科学科 P156。

¹⁰ 山口裕司(2003)「エコフェミニズムの論点とその可能性—C・マーチャントを手がかりに—」『宮崎公立大学人文学部紀要』第 10 巻 1 号宮崎公立大学人文学部 P315 で触れた長年原子力問題と取り組んできた高木仁三郎がその好例である。

¹¹ 同注 9、P176。

¹² 喜納育江(2011)『〈故郷〉のトポロジー場所と居場所の環境文学』水声社 P152。

¹³ 同注 9、P171。

って語った作品だが、視点人物が他の人物に呼びかけをしたり、途中から視点人物を変えたりしたりするような諸要素が錯綜した作品のため、内容を読み取りにくい部分が結構ある。また、作中時間が不透明なためにストーリーを読み取る際に混乱を招きかねない。例えば、明示されていない作中時間を作品の記述から一々拾いながら年表に整理する¹⁴と、2001年と1999年に跨る第3章、1960年の第4章、1966年の第5章、1974年の第6章、1982年の第7章、1982年と1984年に跨る第8章、1993年の第9章、2007年の第10章、2011年の第1、2、11章となっている。これを見て分かるように、各章の時間は前後しており、出来事の発展とその相互関係の脈絡を把握しづらい部分がある。それにしても、石原燃が津島の創作意図として「自分が生まれた年への興味から」¹⁵という点を指摘したことと暗合するように、津島が生まれた年の1947年から始まる物語は、311の起きた2011年真夏までの64年間まで続く。その中でター坊が自殺した歳¹⁶、カズの35歳¹⁷の2箇所を除くと、作品の記述と世界の出来事とは合致し、作中時間が全体的に淀みなく流れていると言えよう。ここからは、作者津島が私小説を書くつもりではないに

¹⁴ 第6章では、同じ年のカズとミッチが26歳とされていると同時に、その昨年(1973年)に起きたネルーダの死・チリの軍事クーデター・パリの平和協定・日航ハイジャックを起点に考えると、ミッチが1948年に生まれたはずである。また、『ヤマネコ・ドーム』(P352)の後に配布した津島の「年譜」を参考に、生まれた年の翌年に1歳と数えるという、数え年ではない当時の時代的風習が分かった。ター坊がカズとミッチより1歳年上のため、ター坊が1947年の生まれのはずで、丁度津島と同じ年に生まれた設定となっている。ちなみに、2011年には生き残ったミッチが63歳で、ヨン子が62歳となった。これも作品中「六十歳を越えたミッチ」(P23)、「六十歳を過ぎたひと」(P325)のヨン子に関する記述と符合している。

¹⁵ 石原燃(2017)「マイノリティとして生きる」『ヤマネコ・ドーム』講談社 P341では、「自分が生まれた年への興味から敗戦直後の時代を描くなかで出会った混血孤児たちと、彼らを引き取った女性のことがずっと気になり続けていた」とある。

¹⁶ ター坊の死については、「息子はあと少しで五十二歳になるところだった」(P32)及び「ある五十一歳の男が台東区の都立谷中霊園の敷地内にあるサクラの木で、首を吊って死んでいるのが見つかった」(P65)の2通りあるが、論者が作成した年表に当たってみると、1999年にター坊が52歳のはずである。

¹⁷ 第8章は1984年の出来事を中心に書かれたものである。それを論者が作成した年表に当たって見ると、カズが36歳のはずだが、作品中「三十五歳にもなって」(P215)と記述されている。

しても、自分の生まれた年から見聞きしてきた 20 世紀後半から 21 世紀にかけての時の経過の中で、ストーリーの時間配置を緻密に計算し、グローバル的視点を持ちつつ、世界の出来事を視野に入れて、トータル的な同時代小説の完成を目指す苦心が感じられよう。

3.1 作品の粗筋と作品名の由来

内容を見ていくと、日本の敗戦後、朝美はアメリカ兵と日本の女性の間で出来た混血孤児を引き取ってホームを運営している。その中から八重は同じ年の混血孤児ミッチ、カズを引き取って育てた。そして、八重とは、いどこ同士になるヨン子の母が、ミッチとカズより一歳年下の娘ヨン子を連れて、よくホームに行ったりして、混血孤児たちと仲良くしている。その後、大部分の混血孤児は、養子養女としてアメリカの家庭に引き取ってもらってアメリカに渡り、新しい生活が始まるが、日本に残った混血孤児もいる。成長した混血孤児は、ミッチの言ったように、「まったくホームの連中は世界中、どこにでもいるんだな」(P169、下線部分は論者による。以下同様)と世界各地に散らばって暮らしている。

そして、ホームの近くでは、ター坊の母とター坊との親子 2 人が暮らしている。ター坊が 9 歳の時に、7 歳の混血孤児でオレンジ色のスカートを履いているミキちゃんを、池に突き落として死なせたという噂が広がっていた。その事件現場にいた幼いミッチ、カズ、ヨン子も、「タマシイの傷」(P267)を大人に至るまで抱えている。もちろん、犯人と名指しされたター坊とター坊の母は長期にわたり、その噂から逃れられなかった。ター坊は、事件発生の 42 年後に自殺してしまった。ター坊の死後、ター坊の母は人目を恐れて暮らしている。また、ミキちゃんの死後、同じくオレンジ色のものを身に着けた 5 名の女性が続々殺害されていった¹⁸。時は 2011 年真夏に変わ

¹⁸ 作品の記述とその前後の文脈を考えて計算してみると、1966 年、1974 年、1982 年、1993 年、1999 年に女性が殺害されたことが分かった。ター坊が 1999 年に自殺したため、5 名の女性を殺害した犯人がター坊である可能性が否定できない。

り、生き残ったミッチがヨン子を連れて、地震で壊れかけたアパートからター坊の母を救出し、一緒に暮らすことを約束したところで、作品は終わっている。

題名の「ヤマネコ・ドーム」についてであるが、作品の終わりにある頁に、「アメリカの核実験はビキニ環礁だけではなく、エニウェットク環礁でも四人から五八年にかけて行われ、(中略)アメリカ軍による除染作業ののち、八〇年、(中略)ルニット島には除染作業で生じた歴大な汚染物質を集めた「ルニット・ドーム」なるコンクリートの巨大なドームが作られていた」(P340)と作者津島佑子がわざわざ説明を付け加えていることから、本作品の題名は多分「ルニット・ドーム」からヒントを得たものと推測されよう。しかし、「ヤマネコ・ドーム」という建物等の具体的存在は作品中には一度も登場していない。強いて言えば、「ヤマネコ」は、オディールの「ブルターニュの城館」(P251)に滞在したミッチに似ており、ヤマネコの持つ「夜行性」(P272)、「ヤマネコの群れ」(P276)の集落性、「金色の眼」(P279)、「ヤマネコたちもあなたの話(幽霊の話・論者注)を聞いている」(P287)と触れられており、「ミッチの眼はときどきヤマネコみたいひかるのね。魅力的な眼だわ」(P272)と語られている。このように、ヤマネコがミッチと重なって記述されたことから見れば、ヤマネコはミッチを指すとも考えられよう。また、物語の最後に、ター坊の母に「おれたち三人が生き残っている。だから、三人でいっしょに動きたい。放射能も降りそそいできた、こんな東京から離れましょう」(P337)と言ったミッチの言葉に込めた意味は、「放射能の煮ごごりの世界」(P323)から遮断するような、頼りにされるシェルターとしての「ヤマネコ・ドーム」のことであろう。一方、他の混血孤児と比べて、ミッチは確かに、「無職の、決まった住まいもない」(P61)が、「いい年して定職がなくて、いくらでも時間があります、定職がないのは、足の悪いのが理由じゃなくて、性格の問題です、けれど信用はできますから」(P283)と、ミッチはオディールにも保証される。要するに、性格に若干問題があるが、人間性として

は信用に足るミッチが歴史・時代の濁流を生き抜く中で、頼りにされるシェルターとしての「ヤマネコ・ドーム」的役割を果たすような任務を担う人物¹⁹として選ばれたのであろう。

3.2 作品の主題—許しの物語の誕生

ポスト 311 の小説は、よく「共生」という主題に収斂されがちである。『ヤマネコ・ドーム』についても、安藤礼二は「共生のための「ドーム」」²⁰と見解を示している。「ヤマネコ・ドーム」に喩えられたミッチがター坊の母に向かって「残された時間を、残された場所で、いっしょに過ごさせてください」(P335-336)、「ター坊の友だちとしてお願いします」(P336)と発した言葉から共生の道を選んだと評されたが、しかし、共生にたどり着く前にある「許し」こそ、『ヤマネコ・ドーム』が他のポスト 311 小説とは違う、特別な意味を持つ作品だという点に注意を促がしたい。それについて、以下、詳論していきたい。

3.2.1 父の不在・母子家庭の物語

「もとは裕福な家のお嬢さんだった」(P115)朝美は、混血孤児を引き取って結婚せずにホームを運営している。そして、「古い生き方がいやだった」(P88)八重²¹は、「結婚をしなかったけれど、赤ちゃんをひとり産んだ。でも赤ちゃんは死んでしまい」(P88)、カズとミッチを引き取って育てた。八重のいところに当たるヨン子の母は、「ヨン子がまだ一歳のころ、家を出て行った父親」(P124)と離別した。また、近所に住んでいるター坊の親子が、ター坊がミキちゃんを突き落とした疑惑を掛けられたところ、「あの親子は大陸からの引きあげ者で、中国人の男に捨てられたんです」(P138)とされているが、「関東大震災のときは、(中略)東京ではなくどこかの田舎町に住んでい

¹⁹ 井上靖の『天平の甕』(1957)では、鑑真を迎え日本に渡る任務を達成した普照の性格と似ている。

²⁰ 安藤礼二(2017)「解説 共生のための「ドーム」」『ヤマネコ・ドーム』講談社 P344-351

²¹ 第5章では、「祖母の財産までたっぷり譲られ、事業を展開してきた」(P111)と記述されている。

た。(中略)田舎を出てから、空から爆弾が降ってくるこわい戦争があった。戦争のあと、赤ん坊の息子を産み落とした」(P34)と反対な記述もされている。後者の記述によれば、ター坊の母は戦争中、日本から離れたことはなく、決して噂に言う「大陸からの引きあげ者」ではない。とはいえ、ター坊親子が母子家庭であることは、基本的に変わりはない。

要するに、ヨン子、ター坊を含め、混血孤児たちは、皆父不在の母子家庭で育てられた人ばかりである。この点については、語り手が「気がつけば、ヨン子にも、ター坊にも、父親という存在は欠けていた」(P231)という、欠損家庭を場とする意図があることは否定できない。

ここから、事件とかかわりがありそうだと噂をされた時に、「あの親子は大陸からの引きあげ者で、中国人の男に捨てられたんです」(P138)という風評を流されたことは、二重差別をされたことにもなる。それは事実ではないにしても、差別されたター坊の母が、なお「アメリカ兵の残していった混血の孤児たちを近所で見かけ、おぞましく感じることもあった。あれに比べれば、こうして母親にかわいがられている息子はまるで王子さまみたい」(P205)と自慢したり、「あんな混血の孤児に比べればずっと息子のほうがまし」(P208)だと自惚れしたりしたことから見れば、当時の日本社会では、混血孤児を最下層に、「大陸から引きあげた者」、「中国人」、「母子家庭」がそれに次ぐ下層に差別されていたことが窺えよう。このように見ると、欠損家庭に生きる混血孤児の存在は社会的被差別性を示すマイノリティの社会構造的な記号であることは明白である。

3.2.2 世界的に見る各階層の差別——混血をめぐって

第2次大戦敗戦後の日本社会では、混血がマイノリティとして蔑視されたのに対して、「長いこと植民地時代を経験したヨーロッパではそうした混血はさほど珍しくない。」(P282)というように、ヨーロッパでは極普通に見られ、むしろ純粋な民族とは何か問題になろう。一方、混血孤児をアメリカに養子として送り出そうとした朝美

は、「深刻な人種差別が今でもアメリカ社会に残されているとは知らずにいた」(P121)。その人種差別の深刻さは、作品中「キング牧師の「アイ・ハブ・ア・ドリーム」(P120)、「ブラック・イズ・ビューティフル」(P121)、「ブラック・パワー」(P121)という呼びかけからも、窺うことが出来る。たとえ偉大なアメリカにおいても、移民国家によく見られる人種・民族差別の厳しい体制があると分かった。

アメリカへ行って新生活を始めた混血孤児たちの中で、ケイトは「アメリカの白人養父にとってもかわいがられたらしい。かわいがられすぎて、深刻な問題になった」(P172)ことを契機に、家出をしてローマに渡って、「演技力で勝負する本格派の女優をめざし」(P171)ている。「母親は日本人で、アメリカの黒人兵に犯されて、この世に生まれ、それからアメリカに養子に出された」(P185)ジェフは、「運わるく、ベトナムに派兵されてしまった」(P183)。「徴兵される前に養父母の許しを得て、カナダに逃げた」(P185)トミーは、「カナダの国籍を得て」(P185)、「学校の先生」(P257)をしている。アニーは、「ファッションデザイナーの卵の、その卵として、パリで働けるようにな」(P154)ってから、日本に戻ってきた。アメリカに行かなかったマコは、「東大理系を受験したら一発で合格、それから建築の勉強をはじめ、ついにパリへの留学まで果たしてしまっ」(P157)て、日本に戻って「建築事務所」(P218)の規模を拡大している。また、日本に残ったタケシは「クリーニング業の成功から実業家になった」(P218)。植物の好きなカズは他所での修行を積んでから東京に戻って、「植木屋」(P17)をしている。「いい年して定職がな」(P283)いミッチ以外の混血孤児たちは、それぞれの運命を辿りながら一生懸命に自分の持つ夢に向かって歩み進んでいる。

3.2.3 オレンジ色が絡む恨みと恐怖

全篇を通して子供の頃殺されたミキちゃんの死は、作品の中核となっている。死に至らしめられたミキちゃんはオレンジ色のスカートを履いていた。作品では広島原爆で被爆した男がアメリカを恨み、ター坊を手なづけ、アメリカ兵が日本に残した混血孤児のミキ

ちゃんを殺したという噂が流れた。ここには敗戦国である日本の被爆者の、原子爆弾を投下した国アメリカへの恨みがありありと読み取れる。それと関連して、2001年の真夏の朝に、カズが木から落ちて死にそうな時に、「真夏の朝、とても綺麗だけど、ひとを殺すこともある。こわい真夏の朝。広島原爆も真夏の空から落ちてきた」(P70)と記述されたように、焦点はやはり原爆に当てられている。

また、ミッチがパリの安いホテルで、「まばゆくオレンジ色にひかる。炎のはずなのに、熱さを感じない。(中略)爆弾でできた穴にちがいない」(P151)と見た夢の続きとして、「爆風におそわれ、オレンジ色の光に包まれる。見ると、泥の沼もオレンジ色に変わっていて(後略)」(P152)と原子爆弾投下を思わせる夢を見た場面がある。その夢から目覚めた後、「夢でおそわれた恐怖と絶望はなかなか消えず、(中略)あのいやな色がつきまといつづける」(P152)と、ミッチはオレンジ色を「いやな色」と感じたのである。

さらに、1956年のミキちゃんの死後、1966年に「オレンジ色のスカートをはいていた」(P133)30歳の女性、1974年に、「オレンジ色のワンピースを着た女子高校生」(P188)、1982年に「派手なオレンジ色」(P237)のストロールで窒息死させられた23歳の女性、1993年に「オレンジ色のスカートをはいた三十代の女性」(P277)、1999年に、「オレンジ色」(P64)の「破られたスカートで首を締められ」(P63)た19歳の女性などの5名が、続々と殺害された。いずれも「オレンジ色」のものを身に着けたという点で共通している。このように、オレンジ色の殺人の不安が東京に広がり、募っているのである。

上述した被爆者、真夏の朝、ミッチの夢、殺害された5名の女性のいずれもが「オレンジ色」と関わっていることでは共通している。そこからは、原爆投下を思わせる「オレンジ色」への恨みと恐怖への喩えが分かる。

3.2.4 ミキちゃんの死—反省した後の許しへ

オレンジ色のスカートを履いたミキちゃんの死は全篇11章を貫いている。作品中、ミキちゃんを殺した犯人については、さまざま

なパターンがあり、それは4通りの説に纏めることが出来る。芥川龍之介『藪の中』(1922)のように、各自がそれぞれの物語を語り、本当は誰が殺したのかは、結局明らかにはならない。

(1) 犯人がター坊だという説

第4章の1960年の時点で、「ター坊だよ、ター坊がミキちゃんを池に落としたんだ、と言ってしまった?」(P98)とヨン子の母と八重に言ってしまったことを回想したが、「でも本当にそうだったのかどうか、今(1960年・論者注)のヨン子にはあやふやになっている」(P98)と半信半疑になった。

第5章の1966年の時点で「ター坊がミキちゃんをつけねらい、意図的に、庭園の池に突き落とし、水のなかでもがくミキちゃんを平然と見おろしていた。この話がいちばん最初にささやかれたうわさだった」(P140)。

(2) 犯人がミキちゃんの仲間たちだという説

第4章の1960年の時点で、「ター坊がミキちゃんを池に突き落とした、といううわさ。ホームの子どもたちも、ここにはいた、といううわさ。その子どもたちがター坊といっしょにミキちゃんを殺した、といううわさ」(P100-101)

第5章の1966年の時点で、「そこには根性の曲がった混血孤児たちがたくさんいた。ター坊は本来、内気で、とてもおとなしい子なので、実際には、野放図な混血孤児たちにそそのかされたのだろう。池でおぼれそうになっているミキちゃんを、同じ施設で育てられた孤児たちはうれしそうに笑いながら見つめていた。そのなかには、孤児たちの友達だという、近所に住む母子家庭の女の子も混じっていた。(P140-141)

(3) 広島原爆で被爆したある男がター坊を手なづけ殺したという説

第5章の1966年の時点で、「広島原爆で被爆したある男がじつは子どもたちを操っていたのだという。かなり凝ったうわさもあつた。被爆した男はアメリカを憎み、アメリカの兵隊が日本に残した

混血孤児に、その憎悪を向けていた。 あんな子どもたちがこの日本に生きていること自体が許せない、日本のためにも抹殺すべきだ、と男は思いつめていた。東京に住むようになってから、近所に混血孤児たちがうろついているのに気がついた。その全部を殺すことはできないので、まずター坊を手なづけ、女の子をひとり、見せしめに殺すことにした」(P141)。

(4) 犯人がミッチ、カズ、ヨン子、ミキちゃん自身だという説

第10章の2007年の時点で、ガス、ミッチ、ヨン子、ミキちゃんからの告白の声がヨン子に聞こえてくる。カズに曰く、「ミキちゃんを池に落としたのは、ター坊じゃなく、ほんとはぼくだったんだよ。 (中略) 同じオレンジ色を身につけた女性を五人殺してしまったのも、ぼくだった」(P318)。ミッチに曰く、「おれがミキちゃんの背中を押したんだ。 (中略) 五人の女性たちを殺すことになった」(P319)。ミキちゃんに曰く、「石があって、足がそれに引っかかっちゃった。 あっという間に池に落ちて、泥水を飲んで、それっきり」(P319)。またヨン子に曰く「ミキちゃんの背中を押したのは、このヨン子で、 そのあと、五人の女性を殺したのも ヨン子だった」(P320)。

上記の4通りの説はいずれも真偽が定められないが、いずれも可能でもあるようで、可能ではないようでもある。ただ一つ確定できたのは、今までミキちゃんを殺害した濡れ衣を他人のター坊に着せたミキちゃんの仲間が、良心が咎めたかのように、深く自己反省し、ター坊に対する恨みを払い、許すことができる人間に変わっていったということである。もう一つは、ヨン子の母の反省である。ミキちゃんの死後、「ミキちゃんには親という存在がいなかった。ミキちゃんの孤独な死が、急に耐えがたいほどつらく、切実に」(P150) 迫ってきたヨン子の母は、「二十年以上の年月」(P210)、ター坊とター坊の母の消息をずっと突き止めようとしていた。しかし、ター坊の死後、「ター坊のお母さんはそれから、どんな思いで生きてきたか」(P321)とター坊の母の心労を労わり、「ター坊とター坊のお母さんに、

どうしてもあやまりたかったの?」(P322)と、無念な思いを抱き、2007年にこの世から去って行き、息を引き取ってしまった。

以上のように、ミキちゃんの仲間の自己反省、ヨン子の母のター坊とその母への労わりからは、許しの大切さが浮かび上がってくる。ミキちゃんの「オレンジ色」が原爆の隠喩であるとするれば、それを殺した犯人とその家族への許しは、戦前戦後の日米の対立葛藤そのものへの許しとも言えよう。

4. エコフェミニズムの視点から読む『ヤマネコ・ドーム』

前述したように、本論文では「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直す」ことを指針として『ヤマネコ・ドーム』を見てきたが、再度考察し明らかになった要点を下記に纏めてみよう。

作品では、まず敗戦国の日本と戦勝国のアメリカとの対立構図が見られる。その中で、「戦争に負けた日本を占領していたアメリカ兵がたまたま性欲に駆られた結果、日本に残していった混血孤児なんだから」(P270)、また「アメリカ軍の占領時代を思いださせるおれたち孤児は、ちょっと困った存在でもあるんです」(P281)と混血孤児は社会の底辺のマイノリティーに位置づけられた。ター坊の母が嘆く「もし、女の子が池のそばにひとりであっていなかったら、もし、女の子がその母親に見捨てられなかったら。アメリカ兵が日本人の母親に出会わなかったら。この日本に、アメリカ兵がこなかったら。日本がアメリカと戦争などしなかったら」(P209)は、歴史から振り返ってみると、到底ありえない想定で、日本が第二次世界大戦を開戦したことで結局は、そういう結果になるしか他に選択の余地はなかったのである。歴史の歯車の重圧が、戦後の一人ひとりの運命を決めていったとも言える。

もう一つの見逃せない大事な構造は、混血孤児のミキちゃんの死により、「大陸の引きあげ者」への差別、原爆投下によるアメリカへの恨みを混血孤児への復讐に転嫁させたことなどの日本社会内部の恨み、偏見が明るみに出ていることである。それは、2011年に到っ

て「日本は二回も原爆を落とされた国なのに、こうして三つ目の核災害を起こし」(P13)た原発事故の矛盾への非難も引き出している。日本国内だけでなく、混血孤児が日本を後にして、向かったアメリカでも、人種差別の問題は深刻となっている。その後、世界で絶え間なく起こってしまった世界的出来事、例えば、ネルーダの死・チリのクーデター・パリの平和協定・日航ハイジャック・ベトナム戦争は、いずれも抑圧を生産する支配制度から生じたものであり、糾弾すべき、批判されるべきものばかりであるが、それは人間社会の構造から生まれたものであるがゆえに、他の選択はありえない、回避できない人間の現実そのものである。

このように、エコフェミニズムの視点を通して『ヤマネコ・ドーム』を読めば、描かれた物語間に織り込まれた第2次大戦後の世界的利害関係と人間社会の構造を容赦なく産み出していく過酷な人間存在の実相がより明白に見られる。

5. おわりに

今回、グローバル的視野を持つスケールの大きい、64年間の時代小説である『ヤマネコ・ドーム』をエコフェミニズムの視点から読み解いた結果、日本社会に潜む偏見、差別だけではなく、世界に存在する人種差別、一国の利益の争奪を炙り出し、問い直すという点で、エコフェミニズムの視点が確かに有効だということが証明されたと言えよう。とはいえ、そうした過酷な現実には人間が人間であるために生まれる構造的な現実であり、世界平和や平等は、到底実現できそうもない夢であろう。しかし、たとえ世界から戦争、原爆、原発などによって引き起こされる各階層の差別、偏見を無くすことはできないにしても、それをただ悪と裁き、自身を正義の位置に立たせることで新しい差別と対立の構造を産み出すのではなく、そうした悪を人間の本質として受け入れ、自分自身がそれを産み出す存在であると見極めるところに通底してゆけば、逆に真の共存の道が切り開かれよう。これこそエコフェミニズムとしての許しの文学で

ある『ヤマネコ・ドーム』が、311 以後の日本に文学として誕生した由来だと言えよう。ここで言う許しとは、正義が悪を裁くところではなく、自身の中に同じ悪を見出すところに生まれる、という無限の受容と共同化の働きなのである。

【註記】本論文は、107 年度科技部研究計画案 (MOST107-2410-H-032-016MY2) による研究成果の一部分である。なお、論者に関する研究業績は <https://orcid.org/0000-0002-5093-582X> をご参照。

テキスト

津島佑子 (2017) 『ヤマネコ・ドーム』 講談社

参考文献

- 井上靖 (1957) 『天平の甍』 中央公論社
(1987) 『芥川龍之介全集 4』 筑摩書房
井上輝子・上野千鶴子代表編 (2000) 『岩波女性学事典』 岩波書店
喜納育江 (2011) 『〈故郷〉のトポロジー場所と居場所の環境文学』 水声社
津島佑子 「「文学」の抵抗力」 (2012) 『臨時増刊 3・11 から一年 100 人の作家の言葉』 文藝春秋
渡久山清美・渡久山幸功 (2013) 「エコフェミニズム再考—開発資本主義家父長制に対するオルタナティブな理論として—」 『人間学科』 29 号 琉球大学法文学部人間科学科
曾秋桂 (2014) 「ネイチャーライティングとしてのポスト 3・11 原発文学—くま・馬・ヒグマが呈示した黙示録—」 『台湾日本語文学学会学報』 第 35 号 台湾日本語文学学会
石原燃 (2017) 「マイノリティとして生きる」 『ヤマネコ・ドーム』 講談社
安藤礼二 (2017) 「解説 共生のための「ドーム」」 『ヤマネコ・ドーム』 講談社

曾秋桂(2018)「エコフェミニズムの視点から読む『チェルノブイリの祈り』」『台湾日本語教育論文集』第30号台湾日本語教育学会

台湾日本語教育學報第32号 禁止複製